

『平治物語』成立論の検証

——『保元物語』『平家物語』『愚管抄』との関係について——

早川厚一

一 『保元物語』『平家物語』との関係について

近時、歴史学の側の平治の乱研究の進展は著しく、元木泰雄によれば、平治の乱とは、次のような政変であった。

・信西を頂点として政治的に自立したかつての鳥羽院近臣達の抗争として平治の乱が生起¹⁾(六五頁)

・新興の院近臣たる信西の台頭が、伝統的院近臣家から特権を奪い取っていったのであり、これに対する反発にこそ、広範な信西打倒の動きが起こった原因があった。こうした反信西のうねりを背景に、武力と摂関家の権威を背景にした信頼、天皇の外戚である経宗、天皇の側近で政務補佐役の惟方らが中心となって、信西打倒と政治主導権奪取を目指した、武力による政変が惹起されることにな²⁾る(一七一頁)

・即位した二条と、院政を目指す後白河との確執の中で、後白河院政を支える信西と、二条親政を支持する伝統的院近臣勢力が衝突する形で、平治元年(一一五九)平治の乱が勃発した³⁾(八頁)

しかし、平治の乱に取材した『平治物語』では、平治の乱は、乱の

中心となった信頼や義朝の私怨から生じたものとする。

例えば、信頼の信西に対する私怨を、一類本『平治物語』は、次のように記す。

・信頼、信西がかやうに讒言し申事をつたへき、て出仕もせず、伏見源中納言師仲卿をあいかたりて、伏見なる所にこもりゐつゝ、馬のはせひきに身をならはし、力わざをいとなみ、武芸をぞ稽古しける。これ、しかしながら、信西をうしなはんがため也。(一一五頁)

後白河院が、信頼の大將任官の可否を信西に相談した際、信西が、信頼などが身をもつて大將をけがさば、いよいよおごりをきはめて、謀逆の臣となり、天のために滅され候はんことは、いかでか不便におぼしめさでは候べき。(一一五頁)

と諫め、信頼の任官を阻止しようとしたということを信頼は聞き、信頼は、その後、出仕もせず、信西の殺害を企てたとする。

また、物語の中で、義朝の私怨は次のように記される。それは、信頼が、清盛ではなく、義朝を仲間へ誘った理由の中で、次のように記される。

・清盛は大宰大貳たる上、大国あまた給って、一族みな朝恩にほこり

恨みなかりければ、よも同意せじとおもひ、源氏左馬頭義朝は、保元のみだれ以後、平家におぼえ劣りて不快者なりと思ければ、ちかづきよりにて懇のこゝろざしをぞかよはしける。(二五三頁)

義朝を、「保元のみだれ以後、平家におぼえ劣りて不快者なり」と見た信頼の判断は正しかった。信頼が義朝を招き、謀叛への勧説をした際、義朝は次のように答えている。

・去保元のみだれに、一門朝敵となりて、類輩ことごとく誅伐せられ、義朝一人にまかりなりて候へば、清盛も内々、所存こそ候らめ。(一五三頁)

去る保元の乱の折に、源氏一門は朝敵となり、係累の者達は総て誅伐され、義朝一人になりましたので、清盛も内々、考えるところがございましょうの意だらう⁶⁾。保元の乱とは、源氏も平氏も係累相乱れての戦いであり、決して源平の合戦ではなかったにも関わらず、義朝が信頼に加担することになった理由を、『平治物語』が、義朝の対平家への遺恨とする点に注意したい。

ただし、先に指摘した、信頼が信西への遺恨から平治の乱を起こしたというのは、『平治物語』独自の虚構ではなかった。

『今鏡』に次の一節がある。

・信頼の衛門督と申ししは、かの大徳が仲あしくて、かかあるあさましさをし出だせるなりけり。御覚えの人に、「いかなる官もならむ」と思ふに、入道諫むるをいぶせく思ひて、軍を起したりけるを、大徳悟りて、行く方知らずなりにけるに、かの御垣守もその報いに、思はぬ屍になむなりにける、いとあさましとも、ことばも及ばぬ事なるべし。⁶⁾(上―四九五頁)

『今鏡』の成立年代については、嘉応二年(一一七〇)説や、承安四年(一一七四)八月十日以後、承安五年七月以前説というように諸説あるが、どちらの説によっても、平治の乱が生起してから十数年後には、「いかなる官もならむ」とする信頼の思いを信西が邪魔したため、そのことを恨みに思った信頼が、信西を亡き者にしようとしたとする平治の乱観が、世上に流布していたことが分かる⁷⁾。そうした乱観に『平治物語』は則りながら、さらに義朝もまた、保元の乱の際の平家への遺恨から、信頼の勧説に応じたとする物語を構想したのでらう⁸⁾。

そして注意すべきは、『平治物語』が、そうした信頼を、
・文にもあらず、武にもあらず、能もなく、又、芸もなし。ただ朝恩にのみほこりて……家にたえてひさしき大臣の大将にのぞみをか
けて、かけまくもかたじけなく、おほけなき振舞をのみぞしける。
……ただ榮華にのみぞほこりける。(一四七―一四八頁)

と徹底的に批判し、そうした信頼を、大将に任官させようとする後白河院に対する信西の先の諫言に見るように、信頼は、物語当初から、奢り故に滅びるであろう運命が予測されていることである。

同様のことは、信頼に加担した弟惟方を叱責する左衛門督藤原光頼の次の言葉にも明らかである。

・御辺、はじめて暴逆の臣にかたらはれて、累家の佳名をうしなはん事、くちおしかるべし。清盛は熊野参詣とげずして、切目の宿よりはせ上。大勢にてこそあんなれ。信頼卿がかたらふ所の兵、幾くならじ。平家の大勢、をしよせて攻めん、時刻をやめぐらすべき。
……人臣の王位をうばふ事、漢朝にはその例ありといへども、本朝

にはいまだ、如此の先規をきかず。天照大神・正八幡宮は、王法をば何とまばらせ給ぞや。(一七三頁)

このように、乱の原因を、乱を起こした者の確執・私怨に求め、そこに乱の敗因を求めるといふ手法は、次に見る『保元物語』も同様である。

『保元物語』では、鳥羽院と崇徳天皇との間には、確執があったとする。以下、半井本『保元物語』で確認してみよう。

・先帝コトナル御ツ、ガモ渡ラセ給ハヌニ、ヨシヲロシ奉ラセ給フコソ浅猿ケレ。カ、リケレバ、御恨ノミ残ケルニヤ、一院新院父子ノ御中、不快ト聞エシ。(五頁)

格別病気であつたというわけでもないのに無理矢理退位させられた先帝崇徳院は、父帝鳥羽院との間に恨みを残すばかりで、父子の御仲は良くなかつたという。

また、近衛天皇崩御後、今度こそは嫡男重仁の即位をとの願ひも叶わず、美福門院の暗躍により、実弟の後白河天皇が即位した際も、

・新院トハ一ツ御腹ニテワタラセ給シカドモ、女院モテナシ奉リ、法皇ニモ内々コシラヘ申サセ給ケルトゾウケ給ル。是ニヨリ、新院御恨今一入ゾマサラセ給ゾ理ナル。(六頁)

と記される。

あるいは、謀叛を前にした崇徳院の思ひは、次のように記される。

・新院、日来思食ケルハ、「昔ヨリシテ、位ヲウケツギ、父譲ヲ得事ハ、嫡庶ニヨラズ、器量ヲモ撰ヒ、外戚ノ安否ヲモ尋ラルルニ、是ハ、当腹ノ寵愛ト云計ニテ、近衛院ニ位ヲ押取レ、恨フカクシテ過シ程ニ、近衛院カクレ給ヌル上ハ、重仁親王ヲコソ帝位ニ可被

備ニ、思ノ外ニ、又、四宮ニコサレヌル事口惜」トヲボシメサレケル。(一一一―一二三頁)

また、乱の加担者藤原頼長にも、崇徳院の思ひは、次のように明かされる。

・上皇ノ尊号ニ烈ベクハ、重仁人数ノ内ニ可入処ニ、数ノ外ナル文ニモ武ニモアラヌ四宮ニ位ヲコサレ、父子ガ怨難押カリツレ共、故院、サテ御座ツル程ハ、ツナガヌ月日ナレバ、二年ノ春秋ヲ送レリシハ忍難シ。今、旧院昇霞ノ後ハ、ナンノ憚カアルベキ。(一四頁)

また、頼長と兄忠通との確執は、頼長が、氏の長者に補され、万機の内覧の宣旨を蒙った時から始まった。頼長は、兄忠通とは、父子の關係にもあつたが、そうした確執の中、頼長は、崇徳院の一宮重仁を即位させて、崇徳院の御代にして、自分が摂政となつて思ひのままに政治を執らうと思つたとする。

・法性寺殿ハ、関白ノ御名計ニテ、何事ニモイロワセ給ハズ、余所ノ人ニテゾ御座ケル。角ノミ関白ノシツマセ給コソ鬱憤深シテ、「当今位ニ付給テ、世淳素ニカエルベクハ、関白ノ辞表ヲサマルカ、内覧ノ氏ノ長者、関白ニ可付歟、兩様天裁ニアリ」ト頻リニ申サセ給フ。此故ニ、関白殿ト左大臣殿ト御兄弟ノ上、父子ノ御契約アリテ、礼儀深く御座ケレドモ、後ニハ御中不快ニゾキコエシ。此左大臣殿ノヲボシメシケルハ、「新院ノ一宮重仁親王ヲ位ニ付奉テ、世ヲ新院ニシラセ進テ、我ママニ天下ノ事ヲ取り可行」ト思食トモ云ヘリ。(一三―一四頁)

こうして、『保元物語』の場合も、乱を引き起こした者への批判は、崇徳院と頼長に集中する。父帝鳥羽院崩御後間もない中での謀叛に

は、人々の声を通して、崇徳院は次のように批判される。

・コハ何事ゾヤ。設新院、国ヲウバキ共共、先院ノ御妻駕僅二十ヶ日ノ内ニ、此御企ヤアルベキ。崇廟ノ御計、凡下ハ難計事也。(一五頁)

あるいは、崇徳院の謀叛の意志を、左京大夫教長から聞いた内大臣実能は、次のように諫言したとする。

・カカル事ヲ内々勸申ス人ノアルニコソ。コハ浅猿キ御計哉。世末ニ望ト申セ共、サスガ天子ノ御運ハ、凡夫ノ兎角思ニヨルベカラズ。伊勢太神宮、正八幡宮ノ御計也。我国ハ、辺地粟散ト云ヘ共、神明統ヲウケテ、宗廟置護給。聖朝、先代、皆弟也。クヤシト思食トモ、位ヲツギ、世ヲ取セ給事、今ニハジメヌ事也。サレバ御運ハ天ニ任セ奉テ、若御心ユカセ給ハヌ事ナラバ、ヨソラクハ御出家ナンドモアリテ、片方ニ入籠テワタラセ給テ、一宮ノ御事ヲコソ仏神三宝ニモ祈申サセ給ハヌ。(二〇頁)

実能の言葉に見る「カカル事ヲ内々勸申ス人」とは、頼長のことを言うのだろう。謀叛の発意は、物語によれば、崇徳院に早くもあったのだが、

・左府本ヨリ、「此君、世ヲ取り給ハバ、撰録ニヲヒテハ無疑」ト思レケレバ、「尤可然。思食立ベキ」由、勸メ申サセ給ケルトカヤ。(一五頁)

とあるように、本来諫止すべき頼長は、こともあろうに己の野望を遂げるために、崇徳院に謀叛を勧めたとする。

また、頼長の勸説に乗った崇徳院に対する実能の批判には、源頼政の勸説にに応じて「由なき謀叛」に加担した以仁王を、即位への野望が

あったとして批判的に描く『平家物語』に相通じるものを見ることができるとはなからうか。⁹⁾

以上、『平治物語』では、平治の乱を、信頼と信西、義朝と平家との私怨による確執から生じた乱と描き、『保元物語』でも、保元の乱を、即位を争った近衛天皇や後白河天皇との確執から生じた崇徳院の恨みや、兄忠通との確執から、崇徳院の御代にして摂政になり、思いのままに政治を執ろうとした頼長の野望から生じた乱として描いていることを指摘した。そして、両物語共に、謀叛を引き起こした者達の確執や私怨や野望に敗退の因を探っているように、『平家物語』もまた同様に、近似した歴史叙述をしていることに気付く。

かつて明らかにしたことだが、『平家物語』は、鹿谷事件を成親の私怨から生じた事件とし、山門事件を西光父子の私怨による譏奏から生じた乱とみなしていた。また、以仁王の挙兵は、源頼政父子の私怨と、以仁王の即位への野望から引き起こされた事件とし、法住寺殿合戦もまた、後白河院の側近知康の義仲に対する私怨から引き起こされた事件として描いていた。¹⁰⁾

そして、『平家物語』の場合も、それらの事件が彼らの私怨から生じた企てであったがために、いずれも失敗に終わったと、批判的に記している点も同様である。こうした歴史叙述の方法の共通性は、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の三作品が、共通した歴史認識の土壌から生成したことを物語ろう。

しかし、三作品は、共通した歴史叙述の方法に立ちながらも、様々な趣向を凝らしている。

例えば、『保元物語』は、親子兄弟が敵味方に分かれた為義や義朝

を初めとする源氏一族間の確執を記さない。為義の院参として、

・其後二六条判官為義ヲ召ケレ共、日比ハ、可参申ナガラ、後ニハ、忽ニ変改シタル気色ニテ、不定ノ由ヲ申シケレバ（二二頁）

とあるように、初めは院参をためらっていた。この後、崇徳院の使者教長の説得により、為義とその子供達は、仕方なく院参することになったのである。為朝が、兄義朝と対戦した時、一番えた矢をはずしたのも、

・内勝セ給ハバ、汝ヲ頼テ、我ハ参ラン。院勝セ給ハバ我ヲ頼テ汝ハ扶レ」ナンド、内々約束モヤ有ラン（五八頁）

との思いが為朝に過ぎたためだが、この後、戦いに敗れた為義が、子供達と共に東国に落ち延びることなく、義朝のもとに出頭しようとしたのも、

・清盛ハ、伯父忠正五人法師ニコソ成タレ共、命計ハ扶タン也。下野守ハ、今度ノ勸賞ニ、左馬頭ニ成タン也。勲功ニ申替、ナドカ父一人ヲ扶ケザルベキト思ヘバ、為義ハ、義朝ガ許ヘ願レテ行テ、命計ヲ申請ヨ」ト云テ、世ヲ渡ラント思ゾ（九三ノ九四頁）

と思ったからである。為義と義朝との間に、内々の約束が物語の上においても、本当にあったとして描かれているのかどうかについては分からないが、彼等親子の確執から親方が敵味方に分かれて戦うことになったと描いているわけではなかった。為義と義朝との対立は、確執故の対立ではなく、物語の上では、致し方ない、望まざる対立であった⁽¹¹⁾。故に、『保元物語』では、乱後の、為義や義朝等の源氏の悲劇が主題となって描かれていくのである。

その源氏の悲劇をさらに増幅させることとなったのが、平家との確

執であった。

・清盛ガ伯父ヲ切ナラバ、義朝、父ヲバ切ランズラント、和讒ニ構テ切テケリ。（九八頁）

と記すように、義朝は、清盛の和讒により、むざむざと父為義を殺すことになったと繰り返し記すのが、『保元物語』である⁽¹²⁾。

その源平との確執に、さらに焦点を当てて描いたのが、『平治物語』であった。

一方、『平家物語』の場合は、私怨による挙兵の失敗を記すだけでなく、故に、朝敵は、朝家の命を受け、征夷大將軍に任じられた源氏や平家により果たされるべきであるという新しい歴史叙述の方法を取り込んだ点にあると言えよう⁽¹³⁾。

二 一類本『平治物語』と『愚管抄』の関係

『平家物語』と『愚管抄』との関係については、これまでに数多くの論が発表されているが、現段階での結論をまとめれば、『平家物語』は、その生成のかなり早い段階において、『愚管抄』の影響を受けているということになる。

では、一類本『平治物語』と『愚管抄』との関係についてはいかがであろうか。

例えば、信西最期の場面など、危機を察して逃げた信西が、敵兵から身を隠すため穴を掘って隠れていたもの、源光保に見つかり、掘り出される前に自害していたとする点等、一類本『平治物語』と『愚管抄』とは重要な点で一致していて注目されるが、逆に、一類本『平

『平治物語』では、信西は、馬に乗って逃げたのに対し、『愚管抄』では、輿に乗って逃げたとするように、細かい点まで一致するわけではない。

あるいは、一類本『平治物語』の内裏脱出記事では、二条天皇は六波羅へ、後白河院は、仁和寺へ脱出したのに対し、『愚管抄』では共に六波羅に脱出したとするし、さらに、『愚管抄』には、二条天皇の内裏脱出時のかなり詳細なエピソードが見られるなど、違いも大きく、一概に両本の影響関係を指摘することは容易ではない。

そうした中、『平治物語』は、一類本の段階で、『愚管抄』を物語作成にあたって素材として利用したと論ずるのが、谷口耕¹⁴である。

『平治物語』一類本の『愚管抄』依拠説の当否を、次に検討してみよう。信西の南都落ちの場面である。

・此人は、天文淵源を究て、推条、掌をさすが如成しが、宿運、此時やつきにけん、三日さきだつて出たる天変を、今夜はじめてぞ見付ける。木星寿命死に有、忠臣、君にかはるといふ天変也。(一六一～一六二頁)

信西は、九日の夜討をかねて知っていたのか、院に知らせに参った所、丁度管弦の遊びの最中であつたため、女房に子細を申し置いて退去し、侍三四人程を召し連れて、所領のある宇治田原の大道寺に着いたとして、先に引用した本文に接続する。それによれば、信西の宿運が尽きたためか、三日前に出ていた天変を、今夜初めて見つけたとする。その天変とは、「木星寿命死に有」というもので、これは、忠臣が君の命に替わるといふ天変であつたという。そこで、信西は、我が命を失う代わりに、後白河院の命を救おうと決意したとする。谷口

は、この内の「木星寿命死」という天変に注目する。この該当部を、金刀比羅本は、「木生寿命亥」、流布本は「木星寿命亥」とするようになり、諸本の表記は一樣でなく、意味する所も、諸注が未詳とするように明らかではない。

この一類本『平治物語』の理解に資すると思われるのが、谷口の注目する、『愚管抄』の次の記事である。

・信西ハカザドリテ左衛門尉師光……ヲグシテ、人ニシラルマジキ夫コシカキニカ、レテ、大和国ノ田原ト云方ヘ行テ、穴ヲホリテカキウヅマレニケリ。ソノ四人ナガラ本鳥キリテ名ツケヨト云ケレバ、西光・西景・西実・西印トツケタリケル。ソノ西光・西景ハ後ニ院ニメシツカハレテ候キ。西光ハ、「タゞ唐ヘ渡ラセ給ヘ。グシマイラセン」トゾ云ケル。「出立ケル時ハ本星命位ニアリ。イカニモノガルマジ」トゾ云ケル。(『愚管抄』二二八～二二九頁)

信西は、「カザドリテ」、師光等を引き連れて田原に落ちたとするが、「カザドリテ」は、どのように解したら良いのか。大系本『愚管抄』の頭注では、「においを感じる」(二二八頁)とし、『愚管抄全註解』(中島悦次、一九六九・7)では、「かさに取りて」の意味で、うわ手に出て、先廻りしての意味か(三三八頁)とする。また、『日本の名著 慈円 北畠親房』(大隅和雄、一九八三・9)の現代語訳では、「信西は不意をうたれた敗北を感じとり」(二二三頁)というように、その解釈は一樣ではなく、「カザドリテ」は、難語の一つのようである。

しかし、『愚管抄全註解』の本文に付された校異によれば、伴信友の付した校本に、「さとりて」とあるように、ここは、「察知する。け

どる。かぎつける。香を意味する「かぎ」を、「けどる」に類推してできた語か」(『角川古語大辞典』一九八二・6)、「かぎつける、察知する、の意か」(『日本国語大辞典第二版』二〇〇一・3)のように解すべきところであろう。

とすれば、こう解することになるうか。『愚管抄』では、信西の子の俊憲と貞憲は信頼の攻撃を受けた院御所から逃げたものの、俊憲は、一旦北の対の屋の縁の下に避難した後逃走した。に対して、信西は、信頼の攻撃を事前に察知して、師光等家臣を引き連れて、田原に逃げている。これを、信西は、院御所から退去したと解すれば、信西は、事の危急を、後白河院や子息達にも告げることなく事前に逃げたことになり、不自然さが残る。とすれば、信頼の攻撃を事前に知った信西は、院御所に赴くことなく、直接田原に向かったと解することとなる。

このように、『愚管抄』の記事を、信西は、夜討のことを事前に知って行方をくらませたというように解すれば、先に見た『今鏡』の「入道諫むるをいぶせく思ひて、軍を起したりけるを、大徳悟りて、行く方知らずなりにけるに」に合致するし、一類本『平治物語』の、「此禪門は、去九日、夜討のこと、かねて内々しりけるにや、このおもむき申入れんとて、院の御所へまいりけるが」(一六一頁)にも合致する。

さて、このように解すれば、一類本『平治物語』と『愚管抄』との関係は、より近接したものとなるが、では、一類本『平治物語』に見る天変「木星寿命死に有」とは、どのような天変を言うのか、また、『愚管抄』の「木星命位」と、一類本『平治物語』の「木星寿命死」

との間には、どのような関係があるのか。後者の点について、谷口は次のように指摘する。

まず、第一点として、一類本『平治物語』の記す天変は、中国の天文書や日本の日記類に全く見られないこと、また、第一点として、天文書では、木星のことを「歳星」と呼ぶことが多いにもかかわらず、一類本『平治物語』では、それを「木星」と呼んでいること、以上の二点を注意する。

ではなぜ、こうした問題が、一類本『平治物語』に見られることとなったのか。その理由として、谷口は、一類本『平治物語』の「木星寿命死に有」が、『愚管抄』の「木星命位ニアリ」という本文の誤解に基づくためか、あるいは、その改変のためと考える。一類本『平治物語』に『愚管抄』を介在させることにより、一類本『平治物語』で、一般的に使われる「歳星」ではなく、「木星」から「木星」となった理由、「命位」から「寿命位」(一類本『平治物語』には、「寿命死」とあるが、「寿命位」の誤りとする)となった理由が分かるとする。

しかし、一類本『平治物語』の「木星寿命死」は、『愚管抄』の「木星命位」の誤解に基づくものとは必ずしも言えないようである。次に引く『玉葉』の傍線部が問題となる。

・今暁女院御祈、修歳星御祭、晴光修之、今月廿日比、木星入_二御命位_一、仍所修也(『玉葉』正治二年十月十七日条)

宜秋門院の御所で、歳星祭が修されたとする記事である。今月の二十日頃に、木星が「御命位」に入るため、歳星祭が修されたことが分かる。その歳星祭の詳細については分からない点が多いが、この『玉葉』の用例からも、一類本『平治物語』の記事は、『愚管抄』から

の改変とは言い難いだろう。その場合、一類本『平治物語』の「木星寿命死」は、谷口が推測するように、「木星寿命位」の誤りと考えて良いだろう。

物語によれば、信西は、夜討のことを前々から知っていたため、この事を申し入れるために、院御所に行ったが、丁度御遊の最中だったため、女房に子細を申し置いて、御所を退去したという。しかし、その後の記事によると、信西の宿連が尽きていたためか、三日前から出ていた天変を、今夜初めて見つけたとする。今夜とは、謀叛のあった九日の夜を指そう。この前後の記事はやや分かりにくい、信西は、九日の夜討のことは事前に知っていたと先に書かれてあったわけだから、三日前から出ていた天変の示す予兆とは、夜討のことではないはずだ。

・木星寿命死に有、忠臣、君にかはるといふ天変也。(二六三頁)
とあるように、帝の命に関わる天変であったとされるだろう。だから、信西は、君の命に替わろうとの思いを持つに至ったのだろう。先に引いた『玉葉』の用例からも、「木星入御命位」との天変は、貴顕の身に関わる天変の表示と考えられ、その理解とも齟齬しない。谷口の、

・木星は帝王の象徴であるから、それが寿命位にある、つまり帝王の死を暗示する天変がここに新たに誕生したというわけだ。
との判断に間違いのないことがわかる。

一方の、『愚管抄』にいう「木星命位ニアリ」というのは、何を意味するのか。『日本の名著 慈田 北畠親房』の現代語訳では、
・行くとしても、星の方位を見るにもどうしてみてものがれるすべ

はあるまい(二三三頁)

とあり、『愚管抄全註解』では、

・その人の生まれた年の星がその年に廻り合わせた。本命に当る。(二八二頁)

とある。この部分の注解に詳しいのも、やはり谷口で、氏によれば、
・信西自身の本命星が本命位にあるということに間違いなからう。言い換えるならば、信西の寿命が尽きたということを天が示したということである。

となる。とすれば、

・信西が奈良へ落ちたのは、本来、自身の命運の尽きるのを悟ったからにはかならない。

とする谷口の判断に間違いはない。また、一方で、一類本『平治物語』が、『愚管抄』とは異なり、「帝王の危難を救う、身代りの行動」として描いていることも確かである。

しかし、一類本『平治物語』のそうした本文が、『愚管抄』の一文を改変して採り入れることによって生成したとは、先に指摘した『玉葉』の記事からしても言い難いように考える。

三 まとめ

本稿で論じたことは、以下の二点である。

1 『保元物語』『平治物語』『平家物語』三作品の歴史叙述の方法を検証してみると、いずれの作品でも、乱の原因を、乱を起こした者達の確執や私怨・野望に求めていること、さらにそれらの事件がそ

うした由なき理由により引き起こされた企てであったがために、いずれも失敗に終わったと、批判的に記されていることを指摘した。しかし、三作品は、このように共通した歴史叙述の方法に立ちながらも、一方で、様々な趣向を凝らして物語を展開していることを具体的に指摘した。

2 一類本『平治物語』と『愚管抄』との関係を、信西南都落ち記事中に見る天変記事によって考えた。その検証によれば、一類本『平治物語』の天変記事は、『愚管抄』の天変記事の誤解によって生成したとは必ずしも言えないようである。

注

- (1) 『平清盛の闘い 幻の中世国家』(角川書店二〇〇一・2)
 (2) 『保元・平治の乱を読みなおす』(日本放送出版協会二〇〇四・12)
 (3) 『源義経』(吉川弘文館二〇〇七・2)
 (4) 新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店一九九二・7)。以下引く、半井本『保元物語』・慈光寺本『承久記』本文も、同書による。
 (5) この部分の解釈については、以下の論で扱った。ご参照願いたい。『保元物語』の諸問題」(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) 四一―二一、二〇〇五・1)
 (6) 竹鼻績。全訳注『今鏡上・中・下』(講談社一九八四・3―一九八四・6)による。
 (7) 拙稿。『平治物語』成立論の検証―『平家物語』との関係について―(名古屋学院大学論集(言語・文化篇) 一八一―二〇〇六・10)
 (8) 慈光寺本『承久記』は、巻頭部分で、神武天皇から、承久三年の後堀河

天皇に至る八十五代の帝のうち、「其間二国王兵乱、今度マデ具シテ、已ニ十二ヶ度ニ成」として、以下九ヶ度の兵乱の例を記す。その内に、八番目の例として保元の乱を記し、九番目に治承寿永の内乱記事を記すが、不思議なことに、その間に生じた平治の乱を記さない。この点については、新大系の脚注でも、「兵乱の叙述としてはこの後に平治の乱が記述されるべき所」(三〇二頁)と記すように、平治の乱の記載があるべきところである。ではなぜ記されていないのであるうか。その平治の乱が、「十二ヶ度」と記されながら九例しか記されない残りの三例の内の一例である可能性もあるが、例えば次のような理由も考えられようか。それは、『平治物語』に見るように、平治の乱が、信頼と信西の私怨による確執という見方が当時では一般的であったため、慈光寺本『承久記』では、国王の兵乱の事例から省かれたと言うように。

- (9) 拙著『平家物語を読む―成立の謎をさぐる』(和泉書院二〇〇〇・3)の第二章「平家物語の歴史叙述の方法と構想」、『平家物語』の歴史観(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) 三三―一、一九九五・7)を基とし、『平家物語』の後白河院―清水寺炎上から法印問答をめぐって(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) 三三―一、一九九四・7)の一部と、『平家物語』と以仁王挙兵譚―以仁王台旨と福原院宣をめぐって―(名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) 二五―一、一九八八・7)とを加え、大幅に改稿した。
 (10) 注9に同じ。
 (11) 野口実の研究によれば、源為義は、家人たちの無法な振舞いによって白河院の信任を喪失して以降、摂関家に仕えることとなり、その時に義朝は廃嫡されたらしい。その後義朝は、鳥羽院に結びついていった。このように、源為義は摂関家を後楯としたのに対して、義朝は鳥羽院権力に支持基盤を求めた。故に、保元の乱の際に、為義が崇徳院勢力の側に立ち、義朝が後白河天皇の側に立ったのは、必然であったと言えよう。
 野口実『源氏と坂東武士』(吉川弘文館二〇〇七・7)

(12) 注5で論じた。

(13) 注9に同じ。

(14) 谷口耕一「平治物語の素材と物語―信西関連章段をめぐって―」(語文論叢二〇、一九九二・10)

(本稿の第二章は、二〇〇三年六月二十二日に行われた軍記・語り物研究会で発表した論『平治物語』成立論の検証』の一部を原稿化したものである。なお、本稿は、二〇〇七年度名古屋学院大学研究奨励金による成果の一つである)